
魔法先生ネギま! ~ Night time ~

西瓜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜Night time〜

【Nコード】

N0909X

【作者名】

西瓜

【あらすじ】

テンプレ的な転生で魂を鍛えることになった主人公。目が覚めたらすでに人外でした。・・・なにこれこわい。 己を貫き通す物語。魔法先生ネギま！〜Night time〜はじまります。この物語はオリ主最強、原作崩壊、ご都合主義、独自設定、アンチ要素などが入っています。厨二的要素満載なので、苦手な方は即刻戻る推奨。駄文注意！

プロローグ（前書き）

処女作です。試行錯誤でやっていくので生ぬるい目で見て行ってね！
駄文ご覚悟！

プロローグ

目が覚めるとそこは真っ白い空間でした。

・・・とりあえず一言。

「しらない天井だ。」

と呟いた瞬間パツッと目の前が光り輝き、
目を開いてみると、そこには明らかに私は偉いですよ的な空気を醸
しだす変なじ「変とは何じゃ！変とは！・・・変なじいさんが目
の前にいた。

「無視か！無視なのか！？わし泣いちゃうぞ。」

「泣いちゃうぞ（笑）。気持ち悪いおじいちゃんですね。ってあれ
？普通に心読まれてね？」

「そりゃあ心ぐらい読めるわい。神じゃもん（ドヤッ）」

めっさドヤ顔されたんだけどこれどうすればいいんだろうか。

「もうちょっと驚いてくれても良いじゃろっ!？」

なんでそんなに冷静なんじゃ!とかブツブツいいながら頭抱えて神

(?)が一名。

状況がわかってない俺

とりあえず説明キボンヌ。

閑話休題

「　　　とまあこんな感じじゃな。」

テンプレ(笑)で死亡

マジサーセンww

能力もらって転生　いまこい。

　とまあ、はしょったけど簡単にいうと

このじいさん実は最高神辺りの位らしくそれでたまたま人らしからぬ力?を持った俺が

部下のミスで死亡。力？を持ってたから元の世界の輪廻転生の環から弾かれる。

それで部下のミスだからじいさん自ら出陣。

元の世界には戻せないけど違う世界に転生できるよ！でどうする？
って感じ。

「おぬしがもつとる力っていうのは、まあ魂の大きさがただ単に大きいってだけじゃ。」

そのままでは意味がないものじゃな。」

魂の大きさ？あれか？許容量が大きいとか？

「まあ概ね合っていないこともないかのお。おぬしがこの状態でも落ち着いておられるのも魂の許容量が大きいというのもあるの。」

ちなみにどれぐらい大きいの？一般人と比べて

「ふむ、わしも驚いたがの、おぬしは今の状態でも下級神ぐらいの魂の質じゃ。」

……つまりどういうことだっばよ？

「魂を鍛えればおぬしは神にもなれるということじゃよ。つまり人が……ん？までよ……？」

途中で手を顎にそえて何かを考えるじいさん。

そうか、神様か。・・・ははっ、ご冗談を。

「そうじゃー！おぬし神にして部下にするかの！」

急に大声出すなよびっくりするだろ・・・。

・・・

・・・

・・・って神に部下あ！？

「よし、そうしようかの！まずは適当な世界で魂を鍛えてもらうかの！ウツハ！ワクワクしてきたWWW」

ちょw拒否権とかないんすかww

「いく世界は、『魔法先生ネギま！』という世界じゃー！おぬしが入ることにより物語は変わってくるじゃろうが、そこはパラレルワールドみたいなものじゃから気にするでないぞ。」

『魔法先生ネギま！』一応マガジンで読んでいたが、魔法とか気と

かあつて結構危くないか？一般ピープルな俺がいつでも一瞬で消し炭だぞおい。

「そこところは考えとるわい。チートで最強オリ主でもやってこい！能力の方はこつちが決めとくからの！」

え？結局行く前提の話なんですかこれ？しまった！泥沼にはまってしまった！

・・・仕方ない腹括るか。

「準備はよいかの？魂はおぬしがそっちの世界ががんばっておれば勝手に純度が上がっていくじゃろうて。まあ第二の人生と思っ生きていきなされ。」

「じいさん。

・・・行くのは構わないが・・・別に原作ブレイクしてしまっても構わないのだろう？」

「じゃあなの」

じいさんの言葉とともに俺の足をつけていた場所。立っていた場所に穴が開いた。
って最後の最後でテンプレだっ!？

「何でさああああああああああああああああああああ

「さてっと、能力は何にしようかのう？不老は基本じゃろ？ほかに
は……」

楽しそうにブツブツと考えながら神は真っ白い空間から消え去った。

1夜 チート転生始まるよー！ (前書き)

主人公、能力確認するの巻。
ガチチートです。

1夜 チート転生始まるよー！

目が覚めるとそこは、森の中だった。

・・・テンプレ乙。

とりあえず起き上がりながら、辺りを見回す。

辺りは真っ暗でどうやら真夜中のようだ。じいさんの配慮だろうか、焚き火が近くで燃えている。

焚き火の近くに手紙らしきものが置いてあった。

「ふむ、じいさんが置いていつ「お、目が覚めたようじゃのう」「うおっ！？」

手紙に触れた瞬間に手紙が動き出し、某魔法使い映画の手紙のように話し始めた。

「おぬしが起きたら能力のことについて話そうと思ってな、ほっほっほ、ちよっとした茶目っ気じゃよ。」

・・・この手紙破り捨ててやるうかこのやるう。辺り真っ暗でビク

ビクしてゐるってのに。

「まあまあ、落ち着こつもの？今日は満月じゃから力が湧いてきたりせんか？」

ん？そいえばなんか力が溢れ出てくる感じがするようないような・・・。

・・・なんぞこれ？

「ほっほっほ、チート能力その1じゃ。日の光とかの弱点なしの吸血鬼化。しかも不老不死だよ、やったね！」

おいばかやめろ「っておいしい！思いつきり人外じゃねえか！なにさらしとんじゃわれえ！」

「夜に加えて満月じゃから力が湧いてでとるわけじゃ。じゃあほかの能力についても色々と説明していくかの。」

「なんだ、吸血鬼ってだけでしかも不老不死だし、十分強いだろうにほかにも能力があるのか？」

「だって、これだけじゃあつまらんぞ。どうせならすっごいチートで固めた方が楽しいのじゃ。」

まあやるならやるでガチチートにしてもいいんだがな。いまさら能力増やしてもチートには変わらんだろうし。

「能力その2、魔力および気のチート化じゃ。このネギまの世界でいうと魔力は近衛木乃香の10倍、気はジャック・ラカンの10倍程度じゃ。魔力や気の運用方法についても頭に粗方入っている状態じゃ。魔法も然り。」

まあここはよくあるチートだな。運用方法については助かるな。力を持ってても使い方がわからないんじゃないしどうしようもないしな。

「能力その3じゃ！全ての上限をなくすこと。修行しても底が見えない。どこまでも上がり続けるってところじゃ。」

これもどこかできたことあるようなチートだな。それにしてもこの神、ノリノリである。

「能力その4！ラストじゃが、これはおぬしの記憶のゲームやアニメを探して決めたんじゃない！」

Dies iraeってゲームが生前好きじゃったようじゃからこのゲームに出てきた聖遺物全てじゃ。

そのためにこのゲームの主人公の『聖遺物を操るための聖遺物』という特性をおぬしに持ってきておるからの。聖遺物を壊されてもおぬしは死にはしないから安心せい。」

聖遺物を扱うために必要なエイヴィヒカイトはおぬしに刻みこんどるから扱えるはずじゃ

じいさん

・・・いや神様！今はじめて尊敬した！うおおお！あの厨二的な技が使えるだと！？形成や創造が俺の手で発動できるだと！？

こ　う　ふ　ん　し　て　き　た　あ　！　！

閑話休題

「はあはあ・・・」

「だ、大丈夫かの・・・？」

「っ、つい興奮してしまった。は、話を戻してくれ。」

「ま、まあおぬしの魂の質は極上じゃから、聖遺物を扱う面では大丈夫じゃろう。まだ馴染んでおらんからまだでてこれんが意志疎通ぐらいできるようあの娘はしとくわい。まあサービスじゃ。」

さすがの神様。太っ腹である。

さすがに話し相手がないのは辛いわ。

「っと、ところで神様。いつなんだ？」

原作始まるちょっと前か？それとも大戦前かな？

「お？いつておらんかったか。原作から1000年前じゃよ。」

へ？

「前すぎじゃあああああ！……！！原作まで何年またせるんだ！
らあああああ！」

「ちよ、落ち着かんか！ちよ、あ、やめ、アツーーーーー！」

「と、とりあえずじゃ、修行時間はたっぷり設けとるからがんばらんじゃぞ！力があつても修行を怠れば強くはなれんからの。」

「はあはあ、わ、わかつとるわこの糞じじい。」

一瞬でも尊敬した俺が馬鹿だった。こんなやつ糞じじいで十分じゃ。

「おぬしはこの世界で自分の信じる道を進めい。おぬしの魂を鍛えることにもつながるはずじゃ。」

ではな、第二の人生楽しんでこい！」

最後に真面目な口調でいう神。
まあ、なんだ・・・

「俺なりにがんばるぜ。まあまた会おうぜ。・・・ありがとな。」

俺が言い切るとじいさんの笑い声とともに手紙に火がつきあつという間に燃え尽きた。

さてと・・・

「これからどうしようかねえ・・・」

俺の呟きは夜風とともに夜の森の中に消えていった。

1夜 チート転生始まるよー！（後書き）

能力についてわからないことがあったりしたら、
独自解釈で進めちゃうかもしれません。ご了承ください。

2夜・キングクリムゾン！（前書き）

早速時間が飛びます。

お約束です。

2夜・キングクリムゾン！

転生してから、400年ぐらいたった。
お約束のキンクリだよ！悪かったね！

とりあえず400年ぐらい何をしてたかっていうとやっぱり修行なわけ。

淡々と400年も修行風景見させられても・・・ねえ？
そんなこんなで400年たったのさ！

どうやら転生した時にいた場所はヨーロッパ辺りらしい。
らしいっていうのは実際に確認はしてないから。
森から出たところの村の人の格好がそれっぽかったのでそう判断した。

まあ速攻で森の中に戻ったけど。
理由は単純で俺がもう人間ではないからってこと。
最初はいいかもしれないけど何年も姿変わらなかつたら化物扱いされるだろう。

そんなこんなで転生したときの森ですつと修行してたのさ。

修行してて気がついたんだけどやっぱりなんていうか体のつくりが根本的にちがうのだろう。

力の制御に苦労した。ちよつと力を入れるだけで木が倒れたり普通だ。

力の制御は10年ぐらいで完璧に。それから魔法と気の扱い方の練習をした。

どうやら気はともかく魔力の方はあんまり才能がなかったようで制御に時間がかかった。

それから魔法を実践レベルで使えるように最初は詠唱ありから、無詠唱とどんどん難易度を上げていき、今ではナギも裸足で逃げ出すような威力に。

ちなみに俺の得意属性は

闇Ⅱ影>氷>炎>>雷>>風>>>水>>「超えられない壁」>>光だ。

・・・なんとまあ吸血鬼っぽい感じで。

水についてはできないことはないけど威力は全然。光についてはお手上げ状態。

まあ種族的にも、性格的にも闇方面だと自負してるから別に気にしてない。気にしてないし！

なんで威力がわかったのかっていうと、

森の中に人間が入ってきてきたまま俺と鉢合わせ。

なにやら魔法使いだったらしく攻撃してきたので”魔法の射手”で応戦したらひどい有様に。
どうやら初実践だったので魔力籠めすぎてたらしく吹っ飛んだ。そりゃあもう血みどろに。

敵対行動をしてきたので普通に放置してきた。

・・・まあ自業自得だろう。それにしてもなんで急に襲ってきたのか謎。

そんなことがあったのが転生してから200年ぐらいたった時だったかな。

それからは魔法はそこそこにして、聖遺物について色々やってた。そいえばじいさんが早く馴染ませてくれる的なことをいってたからそろそろかなと思って、

”罪姫・正義の柱”マルグリット・ホワ・ジュステイスに語りかけてみる。

案の定反応があった。

皆大好きマルグリット・ブルーユこと、マリイさんです！

話し相手が増えるよ、やったね！

どうやらまだ魂の具現化はできないらしい。なんでも完璧に俺の魂に馴染んでないんだとか。

・・・結構時間かかるな。

マリイも無事に確認できたことだし、聖遺物について修行しますか。

んで今に至る。

聖遺物についてはやはりなかなかできないようで、とりあえず形成状態までは出せるようになった。

もちろん全部の聖遺物だ。その中でも次の位階に進んでるのが2つ。

23

言わずもがな、俺たちの相棒マリイこと”罪姫・正義の柱”とマルグリット・ボワ・ジュステイスクリフォート・パチカル”闇の賜物”だ。

闇の賜物はヴラド・ツエペシユの結晶化した血液を素体した聖遺物だから、吸血鬼の俺とは相性が良かったのかもしれない。

それで最近森の中に入って来る魔法使い（バカ）共の相手ばかり

している。

何でか知らないけど俺の噂を聞きつけて俺を退治しにきたらしい。
迷惑甚だしいやつらだな。あの信者どもは。

(大丈夫？夜。)

どうやらマリイに心配をかけたらしい。・・・バカ共め、許すまじ。

(ゆるすまじー。)

ああ、癒される。

おっと、そいえばまだ名前を覚えてなかったな。

夜っていうのは転生前の名前で

今は、 ナイト・A・E・アルカード アタナシオンサンティ って名乗ってる。

ナイトはそのまま夜から。

アタナシアは不滅とか不死って意味。

インサンティは狂気。

アルカードはドラキュラつまり吸血鬼。

厨二乙。まあ元が漫画の世界だしいいじゃないか！

閑話休題

ガサガサッ

「ん？……どうやらおいでなすったようだな。
しこの匂いは……」

しか

複数の足音と草を掻き分ける音が聞こえてくる。

ナイトは少し考えるそぶりを見せた後、ニヤリと三日月のような笑みをし、

足音の方向に向かって跳躍する。

「ああ、今宵も月がきれいだな。

夜の時間のはじまりだ。」

空には三日月。それはそれは大きな三日月が真っ暗な森の中を照らしていた。

2夜・キングクリームゾン！（後書き）

原作キャラを早く出したかったので
キンクリでした。仕方ないね。

次回は原作キャラです。

誰かは察していただけでしょう。

3夜・金髪幼女をつかまえた！（前書き）

聖遺物について

人間の思念、魂を吸収することにより自らの意思を持ち、絶大な力を持つようになった物。聖遺物を扱うにはエイヴィヒカイトという理論が必要。これには、階位が存在し、階位が上がることに戦闘能力が飛躍的に増大する。弱い順に活動・形成・創造・流出となる。創造からは詠唱が必要。

活動：初期段階。限定的に聖遺物の特性を使用できる。

形成：聖遺物を具現化できる。

創造：使い手の魂に刻まれた渴望をルールにした、己と己の聖遺物にとつてのみ都合のいい異界を創り出す、切り札、必殺技。

流出：エイヴィヒカイトの最上位階。創造の異界とそのルールを永続的かつ全世界に流れ出させ、既存の世界法則を塗り替える。つまりはチート。本編ではたぶん出番はないであろう。

とりあえず簡単に説明しました。詳しくはwikiを。

3夜・金髪幼女をつかまえた！

??? Side

「はあはあっ・・・」

息も切れ切れに、だが足は止まることはなく真っ暗な森の中を走り続ける。

幸いにもこの目は暗闇でも機能するよううで密集する木々を掻い潜り只管走り続ける。

「はあはあ」いたぞっ！！逃がすかつ、この魔女め！！
っ！！！！」

すぐ後ろの方から罵声とともに草木を掻き分ける音が聞こえる。

どうしてこんなことになったのだろうか。私がかし
ただろうか。

心の中でどうして？と疑問を出す。
しかし疑問に答えてくれるものは居らず後ろからの声がどんどん近
くなっていく。

密集する木々を抜け、少しひらけた広場のような場所へとでる。

「うっ!?!」

ずっと走り続けていたからだろうか、ズテンっ!という音とともに
ついにこけてしまった。

まずいつ、まずいつ!!

早く立たないとと体を起こそうとするが体がいうことをきいてくれ
ない。

体に力が入らない。どうして?どうして私がこんな目に……。

「追い詰めたぞ!この魔女めっ!観念しろ!」

その言葉とともに私を取り囲む数人の大人。未だにうまく力が入らずに顔だけを向け相手を見る。
ローブを着け、手には棒のようなもの。その姿はまさしく”魔法使い”のものであった。

「とうとう追い詰めたぞっ！我々、”正義の魔法使い”が貴様を退治する。大人しくしておれ！」

絶体絶命。

杖の上に掲げ、何かを口ずさむ。それはまさに詠唱。呪文が唱えられ、不可思議な力が杖に集まる。
この不可思議な力が私を蹂躪し、殺すのであろう。

いやだ・・・どうして・・・どうして私が!?

頭の中で早くそこから逃げろと警報が鳴り響く。しかし力が入らずに動くことができない。

もうだめだっ！

万事休す。

あきらめかけたそのときだった。

「珍しい臭いがしたからきてみれば・・・なんだ、面白いことをしてるじゃないか。」

月夜に煌く、白銀の髪。真っ赤な血のような真紅の瞳。

三日月のような狂気的笑み。

「俺も混ぜろよ、”正義の魔法使い”。」

ナイト・A・I・アルカードとの初めての出会いだった。

ナイト Side

「なにものだつ貴様！我々の邪魔をするなつ。」

そういつて喚き散らす正義の魔法使い（バカ）共。
詠唱を中断しこちらに敵意むき出しである。まったくもって怖くも
なんともないが。

「そんな小さな子供を困って優越感に浸ってんのか？面白い連中だ
な。」

俺の一言で、顔真っ赤になるバカ共。沸点低すぎだろ。カルシウム
取れカルシウム。

「き、き、キサマア！我らが下手にでておればいい気になりおって！キサマも排除してくれる！」

そういつて詠唱をはじめ。それにしても悠長に敵の前で詠唱して
るバカ共。魔力の練りも全然ダメ。
さて、さっさと終わらせようか。

マリイ、準備よろしく。

（ あいあいさー。 ）

「 魔法の射手！連弾・光の7矢！！ 」

「 魔法の射手！連弾・雷の7矢！！ 」

「 魔法の射手！連弾・炎の7矢！！ 」

「 あ、あぶないっ！！ 」

さっきまで倒れていた少女が叫ぶも放たれた”魔法の射手”はナイ
トに向かって進む。

普通の人間ならば当たればただではすまないだろう力。

” 普通

の人間”の話ならば。

「・・・ハッ！」

ナイトが手を前にかざす。すると幾何学的な模様、魔方陣が現れる。“魔法の射手”はその魔方陣 障壁に当たると、火花を散らし飛散していった。

「 なっ！？ば、馬鹿な！この量の魔法がた、ただの障壁のみでっ！？」

魔法使いたちの顔が驚愕に染まる。しだいに顔色の悪くなっていく魔法使いたち。

「貴様らは俺の領域テリトリーに無断で侵入したんだ、それなりの覚悟はできてるんだろっな？」

「ま、ま、まさか・・・お前はこの辺りで有名な吸血鬼かっ！？」

仲間の一人の言葉をきいて一気に顔色が悪くなっていく。

それを見てニヤリと笑うナイト。その笑みはまさしく人外のそれである。

それを見て恐怖が増す魔法使いたち。

マリイ、やるぞ。

（ うん！ ）

「お前たちの敗因は一つ。 俺に会ったことだ。」

形成（Yetzirah） 罪姫・正義の柱 マルグリット・ボワ・ジュステイス

右腕が赤い紋様の刻まれた長大な黒いギロチンに変化する。マリイの魂を宿したギロチン。俺の相棒。このギロチンは強い必殺性を持っているため、不死者とも言えども首を刎ねられると滅びてしまう。

右腕を振るうごとに一人、また一人と命を刈り取っていく。誰も逃げることに許さず全てを聖遺物の糧にしていく。

「 ひ、ひい！？ゆ、ゆる」 さよならだ。 「 ザシユッ

慈悲もなし。最後の一人の首を跳ねる。

ドチャリッと赤い海に崩れ落ちるように倒れる。

「・・・終わったか。マリイおいしかったか？」

（・・・まずいー）

どうやらお気に召さなかったようだ。どこからどう見ても良質な魂ではなさそうだったが。

さてと・・・

「掃除は終わったが、大丈夫かその幼女。」

「・・・うっ・・・あ、ありがとう・・・ございま・・・す。」

「何、心配するな。同属のような気がしたのでな。まあ気まぐれだ。」

人生初の吸血鬼仲間だ、お節介、いいじゃないか。うん。

べ、べつに幼女だからたすけたってわけじゃないんだからねっ！

（　　　だからねっー！）

マリイは癒し。

「あ、あの・・・お名前は・・・？」

上目遣いでこちらを伺いながら聞いてくる金髪幼女。
あら、かわいい。

「ナイト・A・I・アルカード。400年ぐらい前からこの森に住んでる吸血鬼だ、よろしく。」

「よ、400年！？す、すごい・・・」

よせやい、照れるだろう・・・。

金髪幼女は何か考えているようだ。

それにしてもこの血の海どうしようか。

処理とかめんどくさいな。放置すると臭いし、そろそろこの森でてもいいんじゃないか。

「あ、あのっ！ナイトさんは魔法使えるんですよね？」

「ナイトでいい、まあ使えるといえば使えるが・・・」

使えるけど魔法より断然気とか聖遺物のほうが得意なんだけどね。
肉弾戦の方が得意だし。

「あ、あの、そ、その……（モジモジ）」

モジモジと手を遊ばせる金髪少女。なにこれ、かわいいんだけど。チラチラとこつちをみては顔を背ける少女。

あーなるほど。

「……一緒にくるか？吸血鬼になって間もないのだから？」

「え？い、いいんですか……？」

「同属にあつたのは初めてだからな、ちょっと親切になっても問題はないだろう。」

それに見てられないし。

「？なにかいいました？」

「いや、なんでもない。どうする？一緒にくるなら命の安全は保障しよう。それに生きる術も教えよう。」

「お、おねがいします！-」

「了解した。……そいえば名前は？あるのだから？」

「あ、エヴァンジェリン・マグタウエルです。これからよろしくお
願いします！」

うれしそうにニッコリと笑う金髪幼女。もといエヴァンジェリン。

・・・原作キャラやないか。

3夜・金髪幼女をつかまえた！（後書き）

原作キャラ、金髪幼女もといエヴァちゃんです！設定では、吸血鬼になつて3〜4年。

次回は修行回かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0909x/>

魔法先生ネギま! ~ Night time ~

2011年10月19日06時09分発行